

2021年1月24日 佐土原教会礼拝説教  
 聖書箇所：ヨハネ福音書14章18～24節  
 説教題：神を見る

ラジオ英会話で有名な東後勝明という方の証しの本に次のような話がありました。お嬢さんが不登校になって悩んでいた時期でした。東後先生は、大学の教授会の途中、極度の貧血で倒れ、救急車で病院に運ばれました。長時間の検査の結果、貧血は原因不明の腹部の動脈からの出血が原因で、これ以上出血が続くと危ないという状況だったらしいです。数人のお医者さんが、開腹手術をして、出血源を突き止め、止血の処置をしようとした時、「出血が止まった！」という声が手術室に響き、不思議と出血が止まり、そのまま手術なしで快方に向かって行ったそうです。そんな時、奥様の教会の牧師がお見舞いに現れ、「詩篇23篇」を読み始めました。「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われ…」、この辺まで来た時、東後先生は、体中が熱くなり、肩の力がスーッと抜けて、目から大粒の涙がポロポロとこぼれて来ました。そして誰かの声がしました。「そのままいいんだよ」。牧師の読む「詩篇23篇」が「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが」ところに来ると、再び涙がどっと溢れ、生かされている喜びに体が震え、その時以来、いつも神が自分のそばにいて、自分を支えていると、不思議に思えるようになったそうです。これが東後先生の神様との出会いの体験だったそうです。神様との出会い方、色々な形があるということを教えられます。皆さんは、どのような形で神と出会われたのでしょうか。あるいは、神との出会いを求めておられるかも知れません。私も、神様と再び出会う経験を求めています。お1人びとりが、神様にさらに深く出会えようとお出来になるように、お祈りしております。

イエス様の告別の説教が続きます。イエスはこの個所で「主との交わり」について教えて下さっています。ヨハネは「ヨハネの手紙」の中で「私は、あなたがたにも神との交わりを持って欲しいからこの手紙を書くのだ」(1ヨハネ1:3 意訳)と言っています。「神との交わり、神との出会い」が信仰の核心であり、喜びの源泉だと言っているのではないのでしょうか。では、何が私達を、神様との出会い、神様との交わりに導くのでしょうか。

イエスは18節で「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしはあなたがたのところに戻って来るのです」(18)と言われました。これから数時間後、イエス様は逮捕され、十字架に架けられ、十字架の上で死んで行かれます。弟子達は、恐らく良く分かっていませんが、実は、もうすぐそこに、彼らが親に捨てられた孤児のように途方に暮れる時が待っていました。しかしイエスは「あなたがたのところに戻って来る」(18)と言われます。「戻って来る」とは、どういうことでしょうか。それは、絶望している彼らのところに復活のイエス様が現れる、戻って来るということです。ヨハネは、20章でその様子を「その日…弟子達のいた所では、ユダヤ人を恐れて戸が閉めてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立つ(た)…」(20:19)と記しています。イエス様は19節で「あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるのです、あなたがたも生きるからです」(19)と言われますが、「生きるからです」というのは未来形です。「メッセージ訳聖書」は「あなた方は、まさに生きようとしているところだ」と訳しています。弟子達は、

イエス様の甦りを知り、目が開かれた時、本当の意味でイエス様を見ることとなります。そして、イエスが神の許から来られた方であり、自分達もイエスを通して神と交わりを持って生きることが出来るようになる、ということが分かり始めて、靈的に生き始めるのです。神を昔の伝説としてではなくて、現実に働いて下さる方、共に生きて下さる方として捉えて、生き始めるのです。そしてそれは、イエス様の昇天から10日後の「聖霊の降臨」の時、聖霊という形でイエス様が再び彼らのところに戻って来られ、彼らが神の力に満たされた時、言わば完全に彼らの現実となるのです。イエス様が神の御手の中におられたことが分かるだけでなく、今度は彼ら自身が、生けるイエス様の御手の中で生きて行けるということ、言い換えれば、自分の中に見えないイエス様、聖霊を頂いて生きて行けるということ、理解するようになるのです。

20節「あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおる」(20)はややこしい言葉ですが、こんな話があります。「村の鍛冶屋の主人がクリスチャンになりました。そこにかつての悪友が来て言いました。『お前、キリスト教になったんだってなあ。似合ねえよなあ。でも、キリストを信じて、お前は一体どうなったんだい』。鍛冶屋は礼拝説教を思い出しました。『キリストが俺の中に、俺がキリストの中に入った。俺、新しくなったよ』。『お前、良く考えろよ。「キリストがお前の中に、お前がキリストの中に」って意味がわかんねえよ。やっぱりお前、ちょっと頭がおかしくなったんじゃないのか』。その時、聖霊が彼を助けました。鍛冶屋は火の中に突っ込んであった真っ赤に焼けた鉄の棒を取り出し、『ほら、火は鉄の中に、鉄は火の中に入った。信じられないなら、これを掴んでみてくれ』と言いました」。イメージして頂けるでしょうか。私達は鉄の棒です。イエス様の中に入り、またイエス様が私達の中に入って下さるのです。

さて、イエス様はそのような靈的な現実を語った後で、その現実の中で彼らとイエス様(神様)との交わりが深まるための方法を語られます。確かに、彼らはイエス様の復活を見ることによって、イエス様を理解します。聖霊を受けることによって神と繋がって生きようようになります。しかし、彼らにとって大切なのは、復活と昇天と聖霊降臨という大きな出来事の後、それからの長い歩みを、日々、神様(イエス様)との生きた交わりによって、主の現実を感じ、励まされて歩むことでした。戦いの中でその必要があったのです。だからイエス様は、自分と彼らとの豊かな交わりの方法を教えられたのです。それは、イエス様が彼らを愛された、これからも愛されるように、彼らもイエス様を愛することです。人と人の関係でも、お互いに、相手のことを思い合うような交わりでなければ、お互いに励まし、励まされるような交わりは生まれません。

昔、1つの映画を見ました。主人公の若い女性は、左手でしたか、生まれつき手首から先がないのです。それで、いつもお母さんを責めていたのです。「なんで、こんな体に生んだの」と。お母さんは、精一杯の愛情を込めて育てました。しかし彼女は、お母さんへの恨みがまじさが先に立つのです。2人の関係は、ぎくしゃくしていました。しかし、やがてその女性が出産することになり、女の子が生まれて来た時、彼女が真っ先に見たのは赤ちゃんの手でした。自分と同じように手がなかったらどうしよう、そう心配していたのです。そうしたら、ちゃんとあったのです。でもその時、彼女は初めて、母親がどんな思いで自分を育てて来たか、母親も辛かったらろうということ、そんな中で一生懸命育ててくれたんだ、ということ、を思い遣るのです。感謝するのです。母を慕わしく思うのです。そして改めて母親に出会い直すのです。母親

との魂の交わりを経験するのです。ニュアンスが違うかも知れませんが、弟子達も、イエス様を愛そうとする時、イエス様と目が合い、イエス様のことが分かり、神様が分かり、そこに主との豊かな交わりが実現して行くのです。

では、イエス様を愛するとは、どういうことでしょうか。それをイエスは「私を愛するとは、私の戒めを保ち(持ち)、守ること」(21)だと言われます。イエス様の戒め、この一連の箇所でも大切な戒めとしてイエスが教えられたのはこれです。「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」(ヨハネ 14:34~35)。愛に生きることです。そのように生きる人に、イエス様は「わたしもその人を愛し、その人にわたし自身を現します」と言われます。「その人はイエス様を見る」ということです。23節では「わたしの父がその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て…ともに住みます」(23)とも言われています。

何を教えられるのでしょうか。私達も、生きる現実の中でイエス様との現実的な交わりを心に感じて、経験して行くことが必要であり、それが私達の信仰生活を励まして行くと思うのです。そしてその方法は、イエス様が私達を愛して下さっているように、私達もイエス様に信頼して、イエス様の言葉(戒め)に従うことを通して、イエス様を愛して行くことです。その時にイエス様に(神様に)きっと出会えるのです。

カナダの大学で日本人留学生の「日本語バイブル・スタディー」のお世話をしていた時、1人の学生がこんな話をしてくれました。「日本の大学ではミッション・スクールだったけど、キリスト教は遠い存在でした。聖書のテストも苦痛でした。でも、ここに来て、変化を感じました。自分も勉強で苦しんだし、苦しんでいる中で周りの友達にもライバル意識を持つようになって、妬んだりしている自分に気づくようになりました。そんな時にイエス様の『隣人を愛しなさい』という言葉に触れました。自分が隣人を妬んでいたのも、その言葉が迫って来ました。『私もあの人を愛したい』と思って学校に行ったら、その日、その友達が、なぜか私にプレゼントを持って来てくれました。それを見て『信じるってこういうことなんだ』と思いました」。彼女は、神様を感じました。個人的にイエス様と出会ったのです。主との交わりを経験したのです。

「イエス様を見る」というのは、こういう様に誰かを通して起こるかも知れません。いずれにしても、私達が愛に生きようとする時、仕え合おうとする時、「神を経験する」と言えるような、私達の心にくさびを打ち込むような出会いを、神は与えて下さるのではないのでしょうか。具体的な、特別な経験がなくても、森繁昇さんが言っていました。「神様が心に語って下さるからもう揺れない」。そういう神様との出会いもあるでしょう。いずれにしても、イエス様を愛し、イエス様の言葉に踏み出そうとすること、それが、私達が主に会い、主と交わることの出来る方法だと、イエスは教えて下さいました。尾山令仁という先生はご自分の経験からこう言っておられます。「御言葉に従って行く時、神は必ず働いて下さる。信仰にはそれを経験することが大切なのだ」(尾山令仁)。心に刻みたいと思います。

さて、この箇所でもう1つ気になる言葉があります。ユダがイエス様に聞くのです。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現わそうとしながら、世には現わそうとなさらないのは、どう

いうわけですか」(22)。私達も思います。イエス様が世の中の人に現れて下されば良いのに、そうしたらもっと多くの人が信じるのに。しかし、恐らくそうではないのだと思います。イエスが、金持ちとラザロの話をされた時、地獄に行った金持ちが天国のアブラハムに頼みました。

「私の兄弟のところにラザロを送って兄弟に悔い改めるように言わせて下さい」(ルカ 16:27～28 意訳)。しかしアブラハムは言いました。「たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない」(ルカ 16:31)。そこで人々がイエス様を自分の神として信じるということは、起こらないのではないのでしょうか。むしろ、神が取られた方法は、イエス様を信じる人を用いて、ご自身のことを世に現すという方法でした。ある先生のメッセージでこんな話を聞いたのです。天然痘という恐ろしい病気がありました。エドワード・ジェンナーという人がワクチンを開発して、天然痘は撲滅されるのです。ところが、インドでは、なかなかワクチン接種が広がらなかったそうです。ヒンズー教の神様の中に天然痘の神様がいらしいのです。皆にワクチン接種を呼びかけても、人々は受け入れない。そこに日本人の先生が行って「ワクチンはヒンズー教で大事にされている牛から作られているから、ヒンズー教の神様のバチは当たらない」と説得して、何人かの人にワクチンを打つことが出来ました。ワクチンを打たれた人は天然痘にかからない。それを見た村の人々が、ワクチンを受け入れるようになったという話です。つまり主は、私達という小さな存在を用いて、私達が神様を信じて生きる、そのことを通してご自身を世に現す、という方法を取られたのです。その意味でも私達は、神様を経験し、神様に感謝し、神様を喜んで、信仰生活をしたいのです。その私達を通して、神様に会う人が出て来るかも知れません。私はある人が語ってくれた「先生、神は凄いな」というこの一言で、神様に目が開かれる思いがしたことです。

主との出会い、主との交わりが与えてくれるもの、それは、この世が与えることが出来ない平安です、希望です。生きるにも死ぬにも、誰も奪えない平安であり、希望です。繰り返しますが、イエス様の言葉を生きて、主に出会い直し、主との交わりに励まされて生きていきたいと願います。